

隊(納)第一機関銃中隊付を命ぜられ、鹿島灘付近の陣地に行くはずのところ宇都宮の師団參謀部勤務になりました。そこでは北関東地方の兵要地誌作りに参加を命ぜられ、五万分の一の地図を見ながら自動車で現地にゆき、実地検分をする役目につきましました。本土決戦が叫ばれてきた頃でした。師団長は留守第五十一師団長だった古賀健中将でした。納師団は装備が優秀で、小隊の重機も倍の四丁ありました。

昭和二十年四月十八日から師団兵器部勤務となり、兵器の現地生産の担当者として、參謀長を主幹とする対戦車刺突爆雷等の生産に携わりました。八月一日付で陸軍中尉となりましたが、二週間後の八月十五日の終戦の大詔により、九月八日召集解除、復員となり、以来自宅で農業に従事、現在はマンション経営をやっています。

以上私の軍隊歴をお話ししましたが、あの時少し遅れたら今の私が存在するだろうか、という偶然が何回も重なっていることが不思議でなりません。病院生活が長く、決して誇れる戦争体験ではありませんが、

「八十一号作戦」に参加できなかったために生き延びたことが一番大きな偶然だとすれば、亡き戦友、同僚及び部下の霊が私を救ってくれたのだと思ひ、英霊に感謝の誠を捧げる次第です。

ちなみに私の最初の中隊である第五十一師団(基)第一一五連隊の第一機関銃中隊の終戦時の生存者はわずか二人です。

私がラエで入院した後の第五十一師団(基)は、あの高さ四、五〇〇メートルのサワラケット山越えを敢行、二、二〇〇人死没の悲劇に遭遇し、終戦までの死亡率九八・六三パーセントという悲惨な道をたどりました。そのほとんどが餓死といわれています。

### 「ビルマ」戦線

#### 船舶工兵隊

島根県 星野安雄

島根県の中央山間部の木次町日登の田畑八反を耕作

する農家の長男として生まれ、兄弟にも恵まれて育ちました。家事を手伝って青年学校も無事終了、昭和十八（一九四三）年五月、現役兵として船舶工兵第三連隊に入隊のため福岡に集合しました。

私の心の中には、中国山脈の山の中で育ち、海と緑もなく、船に乗った経験も全くない人間が水上で、歩兵の尊い人命をお預かりして戦う使命のある船舶工兵科に選ばれたことに対する不安を一掃できない出征でした。

福岡から上船し、台湾に海上輸送され、高雄の船舶工兵第三連隊に入隊しました。

兵舎は海岸の砂浜にあり、訓練は沖合の本船から大発艇に兵員の移乗搭載、陸地までの走行訓練、上陸訓練、手旗信号、六〇馬力ディーゼルの操作訓練など、毎日これらの訓練が三カ月間続けられました。その間、皇軍のかつての数々の輝かしい上陸作戦の戦績が我々に叩き込まれたのでした。

初年兵一二〇人のうちビルマ方面六〇人、ジャワ方面六〇人に分かれて出征することとなり、私はビルマ

に向かう組に編入されました。

七月十三日、高雄港を出航、尉官一人、下士官二人の引率のもと香港経由、サイゴン港を経てマレー半島近海を南下、さらに対潜対空監視を続けながら南下、八月八日、シンガポール港に寄港、再び貨物船にてマレー半島を北上しました。この時点ではまだ初年兵のみの編成だったので小隊長、分隊長を選んで、お互いに士気を鼓舞し、軍歌を歌い航海を続けラングーンに到着しました。

ラングーンで敵機の初空襲を受けましたが、地上対空部隊の強力な反撃の地上砲火に敵機は撃退され、無事上陸しました。

ラングーンの市街は繁華街で、特に立派なパコダには驚きました。英国統治中ビルマ人の財力の消費を目的としてパコダの建設が進められたと聞きました。我々が向かう中隊本部はラングーンから大きな山脈を越えたタンガップに駐留しているので、そこへ行くのは行軍による他に途方がないと決まりました。

工程は一五〇キロ、アランカン山脈という標高二〇〇メートル級の山岳が連なる大密林地帯を越えた向こう側にあるのです。歩兵ならば慣れてもいるだろうが、我々は船舶工兵隊です。考えざるを得ませんが、原隊追及のためとなれば決行することに定まりました。

季節は夏の赤道に近いビルマの八月です。道は自動車道ですが長い長い登り坂の連続です。水は土民の深い井戸水を探して炊事や飲水として用いました。米は産地であるため求めやすかったのですが、この地方は粃で保存しているので脱穀が大変でした。行軍中、山ヒルや蚊の襲撃には一同参りました。防蚊帽をかぶって寝ると蒸暑くてなかなか就寝できません。一週間行軍してようやく連隊本部に追及し、ヘトヘトに疲れて辛うじて到着しました。

私は第三中隊第三小隊に編入され、大発艇乗組員として勤務することになりました。船舶工兵隊はビルマのインド洋側全海域の各作戦に参加し、そこで海上輸送業務に参加しました。

昭和十九年三月十五日から進撃開始されたビルマ方面軍のインパール作戦に当たっては、作戦の左正面攻撃部隊第三十三師団の三部隊の攻撃発進基地であるアキャブに攻略用の諸資材の集積の輸送が始まり、その資材のうち海上輸送に、我々海上船舶工兵隊は全力を尽くすことになりました。

輸送当初は運行も順調に進歩しましたが、途中から彼我の空中勢力が逆転し、だんだん敵機が海上勢力を占有するに至るや、わが船舶工兵隊の海上輸送も制約を受けることとなりました。航行は夜間に限られ、日中は島陰や海岸の上空から発見し難い場所を選定して停泊する航法に限定され、輸送能力も急激に減退し、このため攻撃部隊に影響を与えることとなりました。

インパール攻略の左翼攻撃師団長・柳田中将は攻撃不振を理由に、作戦中途に軍司令官より解任の命を受けました。その際、師団長は「戦況は刻々と不利にして師団の全滅は時間の問題」と後任の師団長に申し送り述べています。

こうした前線の後方で海上輸送担当している我々船

船工兵隊も、前線の影響を受け逐次基地の後退を余儀なくされました。

我々の基地も当初のタンガップからケーサラに移り、次にニョケカン基地に移りました。ラングーン付近のカチャ基地に後退した頃、木製ボートの船首に爆薬を搭載し、敵艦に突入する特攻訓練が行われました。この時は、いよいよ最期の時が来たと覚悟を決めました。

昭和二十年四月下旬に隊はタイチエンからモールメン間の患者輸送の命令を受け、大発艇九隻、武装艇一隻で出発しました。この時期には敵の海上輸送妨害も激化し、敵機の襲来も激化し、海上ゲリラも増えて来ましたので我々も小発艇に捕獲した速射砲、機関砲などを搭載し、進路の護衛をするという自衛手段を講じて運行していました。

私は当時、兵長に進級し、武装艇長として七人の艇員と乗り組んでいました。出発後、一晚中艇を操舵して翌朝を迎え、艇隊の日中の待避場所の選定を目的に

河口クーリクに接岸偵察中、不意に対岸から敵の速射砲の急射を受けました。私は艇を放し速射砲に飛び付いて砲を発射、応戦しました。四〇五〇発掃射した時、左臀部に受弾、昏倒しました。この交戦中、艇は干潮のため座礁していたので、負傷のまま出血を意に介せず湿地を走って二〇〇メートル後方の本隊の艇まで到着し救助を受けました。

この戦闘で機関砲手は戦死、交戦した敵は日本軍が育成したビルマ義勇軍で、日本軍劣勢と共に反乱軍に寝返った連中であつたと考えられました。

英軍は後方攪乱を目的とし盛んに日本軍の占領地区に空挺隊員を降下させ、各地区のビルマ義勇軍を説得し、反乱を煽動し、そしてそれに呼応するゲリラが増えつつありました。

受傷後空襲があり、隊員は避難しましたが、私と衛生兵は共に艇内に残留しました。臀部の傷は掌大で、座骨に達する深さでした。モールメンに入院、無事手術が終わりました。

陛下の終戦の玉音は病院入院中に拝聴しました。内容は詳細に知ることができなかったが敗戦であることは分かりました。

終戦後、ムドンで武装解除を受け、捕虜生活が始まりました。ムドンに収容されたのは三万人に達しました。ゴム林の中の雑木を伐採し、竹の柱に竹の梁、屋根は茅、壁は葦のような草を編んで使用しました。抑留生活は、起床後営庭の広場で終戦の詔勅を奉読、朝食、作業開始が日課でした。

船舶工兵隊は主として鉄橋架橋が主体をなしていました。糧秣受領、薪取り、衛兵勤務、炊事当番、米の脱穀精米、水汲み、風呂当番等々の集団生活は多岐多様な作業が伴いました。特に英軍は衛生については厳しく、炊事場、便所等の検査は厳重でした。

我々船舶工兵隊は、その技術面が英軍に高く評価され、ビルマ奥地のメイミョー地区の作業に残留することとなりましたが、隊長の強硬な申し入れで、病人や退院患者等は残留組と区別して取り扱われたため、私達の退院患者は一般隊員より一年も早く帰還の恩恵を

得ることができました。隊長のお陰だと感謝しています。

昭和二十一年七月、リバティーに乗船、帰還の途につきました。昭和二十一年八月二十八日、懐かしい故国大竹港に入港、帰郷後木次町において農業に従事、町和牛組合組合長として頑張っています。

## ビルマ戦線従軍記

香川県 玉地 静夫

私は、大正十四（一九二五）年二月十三日、香川県大川郡津田町で生まれました。昭和十八（一九四三）年徴兵検査を受け第一乙種合格。歩兵で丸亀西部第三十二部隊へ現役兵として入営しました。

私が入営した当時の我が家の状況は、農業を営む両親に六人の兄弟姉妹（私は長男）、それに母の妹と田舎の平凡な家庭でした。